

エンパワメントとは

「エンパワメント Empowerment」という言葉は、最初、中世イギリスにおいて教会が領主に一定の権限を付与することを意味していた。その後、1960–70年代にアメリカの公民権運動やフェミニズム運動、さらに世界各地の南北問題や障害者運動で使われるようになる。そこでは、社会的に権利を奪われていた人々が、例えば白人と同等の、あるいは男性と同等の、あるいは健常者と同等の権利を獲得する、という意味合いが強かった。しかし、時代とともに「エンパワメントが必要な人々」がもっと多様かつ広範に捉えられるようになる。例えば、社会的に生きづらさを抱えている人々、自分らしく生きることができていない人々である。

現在のエンパワメントは、それぞれに異なる生きづらさや困難を抱えている人を広く対象とし、その人に潜在する能力・資源に働きかけることによって、本人がその能力・資源に気づいてそれを活性化（エンパワー）し、自らが思考・選択・主張できるように寄り添うことを指すようになった。エンパワメントを目的とする支援者は、対象（相手）の病気や欠陥に注目しながら関わるのではなく、ストレングス（強さ・力）をもった人間同士として出会い、協働的で対等な関係を構築することを理念としている。90年代後半には医療・保健、福祉、教育など多分野で重要視され始め、日本では2000年以降、エンパワメントに関する実践や研究が見られるようになってきている。

このような、市井のアートセラピーの実践領域と重なる分野での動向が参考にできる。確かにすでに評価をまとった概念を当てはめることは、市井のアートセラピーの特質である多様性や柔軟性を見失わせる危険もある。しかし、「エンパワメント」には、日本語の「支援」や「援助」という言葉にはない歴史と意味、そしてこの概念をめぐる議論があり、エンパワメント概念によって定義することがもたらすメリットが大きいと考えられる。

メリットとは

- ① 病理学的アプローチの枠組とその知見から、市井のアートセラピー活動に対しセラピーといえるか否かを**真偽判定する議論に終止符を打つ**ことができる。
- ② エンパワメント型のアートセラピーストによる、病理学的アプローチとしての**偽装**、病理学的知見や言説の**濫用**（無資格使用）を予防できる。
- ③ その結果、セラピスト（治療者／支援者）としての職能上の立場が明確になり、それによって**自らの守備範囲と自己能力に対する意識化**を促すことが可能となる。また、エンパワメントの理念を活動の指針にすることもできる。

- 4 エンパワメント・アプローチを採用するアートセラピーの多様な形態を**セラピー要素の強さとエンパワメント要素の強さの両尺度で立体的に捉える**ことで、個々のセラピストの特性を明示できる。
- 5 その結果、**利用者**はサービスの選択において事前により詳しい判断材料を得ることができる。
- 6 エンパワメントとしての活動評価では、これまでの心療的評価基準を縮小し、自己肯定感や当事者の QOL の状態を把握するなどの**社会的評価基準や福祉的評価基準を拡大することが重要になる**。
- 7 市民参加型アートなどセラピー効果を意図していない活動、あるいは結果的にセラピー効果をもつアート活動などが、**類縁的・近似的な活動**として視野に入れることが可能となる。そして、それらが同じ「エンパワメント」という土俵で語りうるようになる。
- 8 7からさらに、これまでの混然としていた**アートセラピー/エンパワメントの全体的な位置関係**が描ける（「アートセラピーマップ」のページを参照）。